

箴言

第一章一ダビデの子イスラエルの王ソロモンの箴言二こは人に
 智慧と訓誨とをしらしめ哲言を曉らせ三さとき訓と公義と
 公平と正直とをえしめ四拙者にさとりを與へ少者に知識と
 謹慎とを得させん爲なり五智慧ある者は之を聞て學にすみ
 哲者は智略をつべし六人これによりて箴言と譬喩と智慧ある
 者の言とその隠語とを悟らん七エホバを畏るるは知識の本なり
 愚なる者は智慧と訓誨とを軽んず八我が子よ汝の父の教をきけ
 汝の母の法を棄ることなかれ九これ汝の首の美しき冠となり
 汝の項の妝飾とならん一〇わが子よ惡者なんぢ誘ふとも從ふこ
 となかれ二彼等なんぢにむかひて請ふわれらと偕にきたれ
 我儕まちぶせして人の血を流し無辜ものを故なきに伏てねら
 ひ三陰府のごとく彼等を活たるままにて呑み壯健なる者を填
 に下る者のごとくになさん三われら各様のたふとき財貨を填
 奪ひ取たる物をもて我儕の家に盈さん四汝われらと偕に籤を
 ひけ我儕とともに一の金囊を持つべしと云とも五我が子よ彼等
 とともに途を歩むことなかれ汝の足を禁めてその路にゆくこ
 と勿れ一六そは彼らの足は惡に趨り血を流さんとて急げばなり
 一七すべて鳥の目の前にて羅を張は徒勞なり一八彼等はおのれ
 の血のために埋伏しおのれの命をふしてねらぶ九凡て利を貪
 る者の途はかくの如し是その持主をして生命をうしなはしむ

るなり二〇智慧外に呼はり衢に其聲をあげ三熱鬧しき所にさけ
 び城市の門の口邑の中にその言をのべていふ三なんぢら拙
 者のつたなきを愛し嘲笑者のあざけりを樂しみ愚なる者の
 知識を惡むは幾時までぞや三わが督斥にしたがひて心を改め
 よ視よわれ我が靈を汝らにそそぎ我が言をなんぢらに示さん二
 四われ呼たれども汝らこたへず手を伸たれども顧る者なく二五
 かへつて我がすべての勸告をすて我が督斥を受ざりしに由り二六
 われ汝らが禍災にあふとき之を笑ひ汝らの恐懼きたらんと
 嘲るべし二七これは汝らのおそれ颯風の如くきたり汝らのほろ
 び颯風の如くきたり艱難とかなしみと汝らにきたらん時なり二
 ハそのとき彼等われを呼はん然れどわれ應へじ只管に我を求
 めんされど我に遇じ二九かれら知識を憎み又エホバを畏るるこ
 とを悦ばず三〇わが勸に従はず凡て我督斥をいやしめたるによ
 りて三一己の途の果を食ひおのれの策略に飽べし三二拙者の
 違逆はおのれを殺し愚なる者の幸福はおのれを滅さん三三され
 ど我に聞ものは平穩に住ひかつ禍害にあふ恐怖なくして安然な
 らん

第二章一我が子よ汝もし我が言をうけ我が誠命を汝のこころに
 蔵め二斯て汝の目を智慧に傾け汝の心をさとりにむけ三もし
 知識を呼求め聰明をえんと汝の聲をあげ四銀の如くこれを探り
 秘れたる寶の如くこれを探ねば五汝エホバを畏るることを曉
 り神を知ることを得べし六そはエホバは智慧をあたへ知識と

聰明とその口より出づればなり七かれは義人のために聰明を
 たくはへ直く行む者の盾となる八それは公平の途をたもちその
 聖徒の途すぢを守りたまへばなり九斯て汝はつひに公義と公平
 と正直と一切の善道を曉らん〇すなはち智慧なんぢの心にい
 り知識なんぢの靈魂に樂しからん二謹慎なんぢを守り聰明な
 んぢをたもちて三惡き途よりすくひ虚偽をかたる者より救は
 ん三彼等は直き途をはなれて幽暗き路に行み四惡を行ふを樂
 しむ惡者のいつはりを悦び五その途はまがりその行爲は
 邪曲なり六聰明はまた汝を妓女より救ひ言をもて諂ふ婦より
 救はん七彼はわかき時の侶をすてその神に契約せしことを忘
 るるなり八その家は死に下りその途は陰府に赴く九凡てかれ
 にゆく者は歸らずまた生命の途に達らざるなり〇聰明汝をた
 もちてよき途に行ませ義人の途を守らしめん二それは義人は
 地にながらへをり完全者は地に止らん三されど惡者は地より
 亡され悖逆者は地より拔さらるべし

第三章 我が子よわが法を忘るるなかれ 汝の心にわが誠命を
 まもれ二さらば此事は汝の日をながくし生命の年を延べ平康を
 なんぢに加ふべし三仁慈と眞實とを汝より離すことなかれ之を
 汝の項にむすびこれを汝の心の碑にするせ四さらばなんぢ神と
 人との前に恩寵と好名とを得べし五汝こころを盡してエホバに
 倚頼めおのれの聰明に倚ることなかれ六汝すべての途にてエ
 ホバをみとめよさらばなんぢの途を直くしたまふべし七自から

見て聰明とする勿れエホバを畏れて惡を離れよ八これ汝の身に
 良薬となり汝の骨に滋潤とならん九汝の貨財と汝がすべての
 産物の初生をもてエホバをあがめよ〇さらば汝の倉庫はみち
 て餘り汝の酒酔は新しき酒にて溢れん二我子よ汝エホバの
 懲治をかるんずる勿れその誹責を受くるを厭ふこと勿れ三そ
 れエホバはその愛する者をいましめたまふひあたかも父のその
 愛する子を誹むるが如し三智慧を求め得る人および聰明をう
 る人は福なり四それは智慧を獲るは銀を獲るに愈りその利は
 精金よりも善ければなり五智慧は眞珠よりも尊し汝の凡ての
 財貨も之と比ぶるに足らず六其右の手には長壽ありその左
 の手には富と尊貴とあり七その途は樂しき途なりその徑すぢ
 は悉く平康し八これは執る者には生命の樹なりこれ持ものは
 福なり九エホバ智慧をもて地をさため聰明をもて天を置たま
 へり〇その知識によりて海洋はわきいで雲は露をそそぐなり
 三我が子よこれらを汝の眼より離す勿れ聰明と謹慎とを守れ
 三然ばこれは汝の靈魂の生命となり汝の項の妝飾とならん三
 かくて汝やすらかに汝の途をゆかん又なんぢの足つまづかじ二
 四なんぢ臥とき怖るるところあらず臥ときは酣く睡らん五な
 んぢ猝然なる恐懼をおそれず惡者の滅亡きたる時も之を怖る
 まじ二六それはエホバは汝の倚頼むものにして汝の足を守りてと
 らはれしめたまはざるべければなり七汝の手善をなす力あら
 ば之を爲すべき者に爲さざること勿れ八もし汝に物あらば汝

の鄰に向ひ去て復來れ明日われ汝に予へんといふなかれ二九 汝の鄰なんぢの傍に安らかに居らば之にむかひて惡を謀ること勿れ三〇 人もし汝に惡を爲さずは故なく之と爭ふこと勿れ三一 暴虐人を羨むことなくそのすべての途を好とすることなかれ三二 是は邪曲なる者はエホバに惡まるればなりされど義者はその親き者とせらるべし三三 エホバの呪詛は惡者の家にありされど義者の室はかれにめぐまる三四 彼は嘲笑者をあざけり謙る者に恩恵をあたへたまふ三五 智者は尊榮をえ 愚なる者は羞辱之をとりさるべし

第四章 小子等よ父の訓をきけ 聰明を知らんために耳をかたむけよ二 われ善教を汝らにさづくわが律を棄つることなかれ三 われも我が父には子にして我が母の目には獨の愛子なりき四 父われを教へていへらく我が言を汝の心にとどめわが誠命をまもれ然らば生べし五 智慧をえ聰明をえよこれを忘るるなかれまた我が口の言に身をそむくるなかれ六 智慧をすつることなかれ彼なんぢを守らん彼を愛せよ彼なんぢを保たん七 智慧は第一なるものなり 智慧をえよ 凡て汝の得たる物をもて聰明をえよ八 彼を尊べさらば彼なんぢを高く擧げんもし彼を懷かば彼汝を尊榮からしめん九 かれ美しき飾を汝の首に置き 榮の冠弁を汝に予へん一〇 我が子よきけ我が言を納れよさらば汝の生命の年おほからん二 われ智慧の道を汝に教へ義しき徑筋に汝を導けり三 歩くとき汝の歩は艱まず 趨るときも躓かじ三 堅く訓誨を

執りて離すこと勿れこれを守れこれは汝の生命なり一四 邪曲なる者の途に入るることなかれ 惡者の路をあやむこと勿れ一五 これを避よ過ること勿れ 離れて去れ一六 是は彼等は惡を爲さざれば睡らず人を躓かせざればいねず一七 不義のパンを食ひ暴虐の酒を飲めばなり一八 義者の途は旭光のごとしいよいよ光輝をまじして晝の正午にいたる一九 惡者の途は幽冥のごとし彼らはその躓くものなになるを知ざるなり二〇 わが子よ我が言をきけ我が語るところに汝の耳を傾けよ二一 汝の目より離すこと勿れ汝の心のうちに守れ二二 是は之を得るものの生命にしてまたその全體の良業なり二三 すべての操守べき物よりもまさりて汝の心を守れそは生命の流これより出れはなり二四 虚偽の口を汝より棄さり 惡き口唇を汝より遠くはなせ二五 汝の目は正しく視汝の眼瞼は汝の前を眞直に視るべし二六 汝の足の徑をかんがへはかり汝のすべての道を直くせよ二七 右にも左にも偏ること勿れ汝の足を惡より離れしめよ

第五章 我が子よわが智慧をきけ 汝の耳をわが聰明に傾け二 しかしてなんぢ謹慎を守り汝の口唇に知識を保つべし三 娼妓の口唇は蜜を滴らし 其口は脂よりも滑なり四 されど其終は茵陳の如くに苦く兩刃の劍の如くに利し五 その足は死に下りその歩は陰府に趣く六 彼は生命の途に入らず 其徑はさだかならねども自ら之を知ざるなり七 小子等よいま我にきけ我が口の言を棄つる勿れ八 汝の途を彼より遠く離れしめよ 其家の門に近づくと

となかれ九 恐くは汝の榮を他人にわたし 汝の年を憐憫なき者にわたすにいたらん一〇 恐くは他人なんぢの資財によりて盈され 汝の勞苦は他人の家にあらん一 終にいたりて汝の身なんぢの體亡ぶる時なんぢ泣きみていはん二 われ教をいとひ心に譴責をかるんじ三 我が師の聲をきかず 我を教ふる者に耳を傾けず四 あつまりりの中會衆のうちにてほとんと諸の惡に陥れりと五 汝おのれの水溜より水を飲みおのれの泉より流る水をのめ六 汝の流をほかに溢れしめ 汝の河の水を衢に流れしむべけんや七 これを自己に歸せしめ 他人をして汝と偕にこに與らしむること勿れ八 汝の泉に福祉を受しめ 汝の少き時の妻を樂しめ九 彼は愛しき鹿のごとく美しき鹿の如しその乳房をもて常にたれりとしその愛をもて常によろこべ一〇 我子よ何なればあそびめをたのしみ 淫婦の胸を懷くや二 それ人の途はエホバの目の前にあり彼はすべて其行爲を量りたまふ三 惡者はおのれの愆にとらへられその罪の繩に繋る四 彼は訓誨なきによりて死その多くの愚なることによりて亡ぶべし

第六章 一 我子よ汝もし朋友のために保證をなし 他人のために汝の手を拍ば二 汝その口の言によりてわなにかかりその口の言によりてとらへらるるなり三 我子よ汝友の手に陥りしならば斯して自ら救へすなはち往て自ら謙たり只管なんぢの友に求め四 汝の目をして睡らしむることなく 汝の眼瞼をして閉しむること勿れ五 かりつどの手より鹿のがるることと鳥とる者の手よ

り鳥のがるる如くしてみづからを救へ六 情者よ蟻にゆき其爲すところを觀て智慧をえよ七 蟻は首領なく有司なく君主なければども八 夏のうちに食をそなへ 收穫のときに糧を斂む九 情者よ汝いづれの時まで臥息むやいづれの時まで睡りて起ざるや一〇 しばらく臥ししばらく睡り手を又きてまた片時やすむ一 さらば汝の貧窮は盜人の如くきたり汝の缺乏は兵士の如くきたるべし二 邪曲なる人あしき人は虚偽の言をもて事を行ふ三 彼は眼をもて胸せし脚をもてしらせ 指をもて示す四 その心に虚偽をたもち常に惡をはかり 爭端を起す五 この故にその禍害にはかに來り 援助なくして立刻に敗らるべし六 エホバの憎みたまふもの六あり否その心に嫌ひたまふもの七あり一七 即ち驕る目いつはりをいふ舌つみなき人の血を流す手一八 惡き謀計をめぐらす心すみやかに惡に趨る足一九 詐偽をのぶる證人および兄弟のうちに爭端をおこす者なり二〇 我子よ汝の父の誠命を守り 汝の母の法を棄る勿れ二 常にこれを汝の心にむす び之をなんぢの頸に佩よ三 これは汝のゆくとき汝をみちびき 汝の寝るとき汝をまもり 汝の寤るとき汝とかわらん四 それ誠命は燈火なり 法は光なり 教訓の懲治は生命の道なり五 汝をまもりて 惡き婦よりまぬかれしめ 汝をたもちて淫婦の舌の詭媚にまどはされざらしめん六 其の艶美を心に戀ふことなかれその眼瞼に捕へらるること勿れ七 八 それ娼妓のために人はただ僅に一撮の糧をのこすのみにいたる 又淫婦は人の尊き生命を求むるな

リ二七人は火を懐に抱きてその衣を焚れざらんや二八人は熱火を踏て其足を焚れざらんや二九その隣の妻と姦淫をおこなふ者もかくあるべし凡て之に捫る者は罪なしとせられず三〇竊む者もし饑しときに其饑を充さん爲にぬすめるならば人これを藐ぜじ

三二もし捕へられなばその七倍を償ひ其家の所有をことごとく出さざるべからず三三婦と姦淫をおこなふ者は智慧なきなり之を行ふ者はおのれの靈魂を亡し三四傷と陵辱とをうけて其恥を雪ぐこと能はず三五妒忌その夫をして忿怒をもやさしむればその怨を報ゆるときかならず寛さじ三六いかなる贖物をも願みず衆多の饋物をなすともやはらがざるべし

第七章一我子よわが言をまもり我が誠命を汝の心にたくはへよ二我が誠命をまもりで生命をえよ我法を守ること汝の眸子を守るが如くせよ三これを汝の指にむすびこれを汝の心の碑に銘せ四なんぢ智慧にむかひて汝はわが姉妹なりといひ明理にむかひて汝はわが友なりといへ五さらは汝をまもりて淫婦にまよはざらしめ言をもて媚る娼妓にとほざからしめん六われ我室の牖により櫃子よりのぞきて七拙き者のうち幼弱者のうちに一人の智慧なき者あるを觀たり八彼衢をすぎ婦の門にちかづき其家の路にゆき九黄昏に半宵に夜半に黑暗の中にあるけり一〇時に娼妓の衣を着たる狡らなる婦かれにあふ一一この婦は謙しくしてつつしみなく其足は家に止らず一二あるときは衢にあり或時はひろばにありすみずみにたちて人をつかがふ一三この婦かれ

をひきて接吻し恥しらぬ面をもていひけるは四われ酬恩祭を獻げ今日すでにわが誓願を償せり一五これによりて我なんぢを迎へんとていで汝の面をたづねて汝に逢へり一六わが榻には美しき褥およびエジプトの文象をしき一七没藥蘆薈桂皮をもて我が榻にそそげり一八來れわれら詰朝まで情をつくし愛をかよはして相なぐさめん一九それは夫は家にあらず遠く旅立して二〇手に金囊をとれり望月ならでは家に歸らじと二三多の婉言をもて感し口唇の諂媚をもて誘へば三わかき人ただちにこれに隨へりあだかも牛の空地にゆくが如く愚なる者の桎梏をかけるる爲にゆくが如し三四遂には矢その肝を刺さん鳥の速かに羅にいりてその生命を喪ふに至るを知るがごとし三四小子等よいま我にきけ我が口の言に耳を傾けよ三五なんぢの心を淫婦の道にかたむくること勿れまたこれが徑に迷ふこと勿れ二六それは彼は多の人を傷つけて休せり彼に殺されたる者ぞ多かる二七その家は陰府の途にして死の室に下りゆく

第八章一智慧は呼はらざるか聰明は聲を出さざるか二彼は路のほとりの高處また街衢のなかに立ち三邑のもろもの門邑の口および門々の入口にて呼はりいふ四人々よわれ汝をよび我が聲をもて人の子等をよぶ五拙き者よなんぢら聰明に明かなれ愚なる者よ汝ら明かなる心を得よ六汝きけわれ善事をかたらんわが口唇をひらきて正事をいだしん七我が口は眞實を述べわが口唇はあしき事を憎むなり八わが口の言はみな義しそのつ

ちに虚偽と奸邪とあることなし九是みな智者の明かにするところ
 知識をつる者の正とするところなり一〇なんぢら銀をつくる
 よりは我が教をうけよ 精金よりもむしろ知識をえよ二それ
 智慧は眞珠に愈れり 凡の寶も之に比ぶるに足らず三われ智慧
 は聰明をすみかとし 知識と謹慎にいたる三エホバを畏ると
 は惡を憎むことなり 我は傲慢と驕奢 惡道と虚偽の口とを憎む
 一四 謀略と聰明は我にあり 我は了知なり 我は能力あり一五 我に
 由て王者は政をなし 君たる者は義しき律をたて一六 我により
 て主たる者および牧伯たちなど凡て地の審判人は世ををさむ一七
 われを愛する者は我これを愛す 我を切に求むるものは我に遇
 ん一八 富と榮とは我にあり 貴き寶と公義とも亦然り一九 わが果
 は金よりも精金よりも愈りわが利は精銀よりもよし二〇 我は義
 しき道にあゆみ 公平なる路徑のなかを行む二一 これ我を愛する
 者に貨財をえさせ 又その庫を充しめん爲なり二三 エホバにし
 へ其御わざをなしそめたまへる前にその道の始として我をつ
 くりたまひき二三 永遠より元始より地の有ざりし前より我は立
 られ二四 いまだ海洋あらず いまだ大なるみづの泉あざりしと
 き我すでに生れ二五 山いまださだめられず 陵いまだ有ざりし前
 に我すでに生れたり二六 即ち神いまだ地をも野をも地の塵の
 根元をも造り給はざりし時なり二七 かれ天をつくり海の面に
 穹蒼を張たまひしとき我かしこに在りき二八 彼つへに雲氣をか
 たく定め 淵の泉をつよくならしめ二九 海にその限界をたて 水を

してその岸を踏えざらしめ また地の基を定めたまへるとき三〇
 我はその傍にありて創造者となり 日々に欣び恒にその前に樂
 み三 其の地にて樂み又世の人を喜べり三二 されば小子等よいま
 我にきけわが道をまもる者は福ひなり三三 教をききて智慧をえ
 よ之を棄ることなかれ三四 凡そ我にきき 日々わが門の傍にま
 ちわが戸口の柱のわきにたつ人は福ひなり三五 そは我を得る者
 は生命をえ エホバより恩寵を獲ればなり三六 我を失ふものは
 自己の生命を書ふすべて我を惡むものは死を愛するなり
 第九章 智慧はその家を建て その七の柱を砍成し二その畜を宰
 りその酒を混和せその筵をそなへ三その婢女をつかはして 邑
 の高處に呼はりいはしむ四 拙者よここに來れと また智慧な
 き者にいふ五 汝等きたりて我が糧を食ひわがまぜあはせたる酒
 をのみ六 拙劣をすてて生命をえ 聰明のみちを行め七 嘲笑者をい
 ましむる者は恥を己にえ 惡人を責むる者は疵を己にえ八
 嘲笑者を責むることなかれ 恐くは彼なんちを惡まん 智慧ある
 者をせめよ 彼なんちを愛せん九 智慧ある者に授けよ 彼はます
 ます智慧をえん 義者を教へよ 彼は知識に進まん一〇 エホバを
 畏ることは智慧の根本なり 聖者を知るは聰明なり一一 我によ
 り汝の日は多くせられ 汝のいのちの年は増べし一二 汝もし
 智慧あらば自己のために智慧あるなり 汝もし嘲らば汝ひとり
 之を負ん三 愚なる婦は嘩しく且つたなくして何事をも知らず
 一四 其の家の門に坐し 邑のたかき處にある座にすわり一五 道をま

すぐに過る往來の人を招きていふ一六 拙者よここに來れとまた智慧なき人にむかひては之にいふ一七 竊みたる水は甘く密かに食ふ糧は美味ありと一八 彼處にある者は死し者その客は陰府のふかき處にあることを是等の人は知らざるなり

第一〇章一ソロモンの箴言 智慧ある子は父を欣ばす 愚なる子は母の憂なり二 不義の財は益なしされど正義は救ひて死を脱かれしむ三 エホバは義者の靈魂を餓えしめず 惡者にその欲するところを得ざらしむ四 手をものうくして動くものは貧くなり勤めはたらく者の手は富を得五 夏のうちに斂むる者は智き子なり収獲の時にねむる者は辱をきたす子なり六 義者の首には福祉きたり 惡者の口は強暴を掩ふ七 義者の名は讃られ 惡者の名は腐る八 心の智き者は誠命を受くされど口の頑愚なる者は滅さる九 直くあゆむ者はそのあゆむこと安しされどその途を曲ぐる者は知らるべし一〇 眼をもて胸せする者は憂をおこし一 口の頑愚なる者は亡びたる一 義者の口は生命の泉なり 惡者の口は強暴を掩ふ二 怨恨は争端をおこし 愛はすべての愆を掩ふ三 哲者のくちびるには智慧あり 智慧なき者の背のためには鞭あり四 智慧ある者は知識をたくはぶ 愚かなる者の口はいまにも滅亡をきたらす五 富者の資財はその堅き城なり 貧者のともしきはそのほろびなり六 義者が動作は生命にいたり 惡者の利得は罪にいたる一七 教をまもる者は生命の道にあり 懲戒をすつる者はあやまりにおちいる一八 怨をかくす者には虚偽のくち

びるあり 誹謗をいだす者は愚かなる者なり一九 言おほければ罪なきことあたはず その口唇を禁むるものは智慧あり二〇 義者の舌は精銀のごとし 惡者の心は値すくなし二一 義者の口唇はおほくの人をやしなひ 愚なる者は智慧なきに由て死ぬ三二 エホバの祝福は人を富す 人の勞苦はこれに加ふるどころなし二三 愚かなる者は惡をなすを戯れ二四 惡者の怖るるところは自己にきたりにとりても是のごとし二五 惡者の怖るるところは自己にきたり 義者のねがふところはあたへらる二六 狂風のすぐるとき 惡者は無に歸せん 義者は窮なくとも 基礎のごとし二七 情る者のこれを遣すものに於るは 醉の齒に於るが如く 煙の目に於るが如し二八 エホバを畏ることは人の日を多くす されど 惡者の年はちぢめらる二九 義者の望は喜悅にいたり 惡者の望は絶べし三〇 エホバの途は直者の城となり 惡を行ふものの滅亡となる三一 義者は何時までも動かされず 惡者は地に住むことを得じ三二 義者の口は智慧をいだすなり 虚偽の舌は拔るべし三三 義者のくちびるは喜ばるべきことをわきまへ 惡者の口はいつはり

を語る 第一一章一いつはりの權衡はエホバに惡まれ 義しき法馬は彼に欣ばる二 驕傲きたれば辱も亦きたる 謙たる者には智慧あり三 直者の端莊は己を導き 悖逆者の邪曲は己を亡す四 實は震怒の日に益なし されど正義は救ふて死をまぬかれしむ五 完全者はその正義によりてその途を直くせられ 惡者はその惡によりて跌

るべし六 直者はその正義によりて救はれ 悖逆者は自己の惡によりて執へらる七 惡人は死るときにその望たえ不義なる者の望もまた絶べし八 義者は艱難より救はれ 惡者はこれに代る九 邪曲なる者は口をもてその鄰を亡すされど義しき者はその知識によりて救はる一〇 義しきもの幸福を受けばその城邑に歡喜あり 惡きもの亡ざるれば歡喜の聲おこる一二 城邑は直者の祝ふに倚て高く擧られ 惡者の口によりて亡ざる一二 其の鄰を侮る者は智慧なし 聰明人はその口を噤む三 往て人の是非をいふ者は密事を洩し 心の忠信なる者は事を隠す四 ばかりことなければ民たふれ 議士多ければ平安なり五 他人のために保證をなす者は苦難をつけ 保證を嫌ふ者は平安なり六 柔順なる婦は榮譽をえ 強き男子は資財を得七 慈悲ある者は己の靈魂に益をくはへ 殘忍者はおのれの身を擾はす八 惡者の獲る報はむなく 義を播くもの得る報賞は確し九 堅く義をたもつ者は生命にいたり 惡を追もとむる者はおのれの死をまねく一〇 心の戻れる者はエホバに憎まれ 直く道を歩む者は彼に悦ばる一二 手に手をあはすると 惡人は罪をまぬかれず 義人の苗裔は救を得三 美しき婦のつつしみなきは金の環の冢の鼻にあるが如し三 義人のねがふところは凡て福祉にいたり 惡人のぞむところは震怒にいたる四 ほどこし散して反りて増ものあり 與ふべきを吝みてかへりて貧しきにいたる者あり五 施與を好むものは肥え 人を潤ほす者はまた利潤をつく六 穀物を蔵めて糶

ざる者は民に誑はる 然れど售る者の首には祝福あり七 善をもとむる者は恩恵をえん 惡をもとむる者には惡き事きたらん八 おのれの富を恃むものは仆れんされど 義者は樹の青葉のごとくさかえん九 おのれの家をくるしむるものは風をえて所有とせん 愚なる者は心の智きもの僕とならん一〇 義人の果は生命の樹なり 智慧ある者は人を捕ふ三 みや義人すらも世にありて報をうくべし 況して惡人と罪人とをや 第一二章 訓誨を愛する者は知識を愛す 懲戒を惡むものは畜のごとし 善人はエホバの恩寵をつけ 惡き謀略を設くる人はエホバに罰せらる三 人は惡をもて堅く立つことあたはず 義人の根は動くことなし四 賢き婦はその夫の冠弁なり 辱をきたらする婦は夫をしてその骨に腐あるが如くならしむ五 義者のおもひは直し 惡者の計るところは虚偽なり六 惡者の言は人の血を流さんとて何ふされど 直者の口は人を救ふなり七 惡者はたふされて無ものとならんされど 義者の家は立べし八 人はその聰明にしたがひて響られ 心の悖れる者は藐めらる九 卑賤してしもべある者は自らたかぶりて 食に乏き者に愈る一〇 義者はその畜の生命を顧みるされど 惡者は殘忍をもてその憐憫とす一二 おのれの田地を耕すものは食にあく 放蕩なる人にしたがつ者は智慧なし三 惡者はあしき人の獲たる物をうらやみ 義者の根は芽をいだす三 惡者はくちびるの愆によりて罣に陥るされど 義者は患難の中よりまぬかれいでん四 人はその口の徳により

て福祉に飽ん人の手の行爲はその人の身にかへるべし二五 愚なる者はみづからその道を見て正しとすされど智慧ある者はすめを容る二六 愚なる者はただちに怒をあらはし 智ぎものは恥をつつむ二七 眞實をいふものは正義を述べいつはりの證人は虚偽をいふ二八 妄りに言をいだし剣をもて刺がごとくする者ありされど智慧ある者の舌は人をいやす二九 眞理をいふ口唇は何時までも存つされど虚偽をいふ舌はただ瞬息のあひだのみなり三〇 悪事をはかる者の心には欺詐あり 和平を謀る者には歡喜あり三一 義者には何の禍害も来らず 悪者はわざはひをもて充さる三二 いつはりの口唇はエホバに憎まれ 眞實をおこなふ者は彼に悦ばる三三 賢人は知識をかくすされど愚なる者のころは愚なる事を述べ三四 勤めはたらく者の手は人をささむるにいたり情者は人に服ぶるにいたる三五 うれひ人の心にあれば之を屈ますされど善言はこれを樂します二六 義者はその友に道を示すされど惡者は自ら途にまよふ二七 情者はおのれの獵獲たる物をも燻す 勤めはたらくことは人の貴とき寶なり二八 義しき道には生命ありその道すぢには死なし

第二章 智慧ある子は父の教訓をきき 戲謔者は懲治をきかず 二人はその口の徳によりて福祉をくらひ 悖逆者の靈魂は強暴をくらふ三三 その口を守る者はその生命を守る その口唇を大きくひらく者には滅亡きたる四 情者はころに慕へども得ることなし 勤めはたらく者の心は豊饒なり五 義者は虚偽の言をにくみ

惡者ははぢをかつかむらせ面を赤くせしむ六 義は道を直くあゆむ者をまもり 惡は罪人を倒す七 自ら富めりといひあらはして些少の所有もなき者あり 自ら貧しと稱へて資財おほき者あり八 人の資財はその生命を贖ふものとなるあり然ど貧者は威嚇をきくことあらず九 義者の光は輝き惡者の燈火はけさる一〇 驕傲はただ爭端を生ず 勸告をきく者は智慧あり二 詭計をもて得たる資財は減るされど手をもて聚めたくはふる者はこれを増すことを得三 望を得ること遅きときは心を疾しめ 願ふ所既にとぐるときは生命の樹を得たるがごとし三 御言をかるんする者は亡され 誠命をおそる者は報賞を得四 智慧ある人の教訓はいのちの泉なり 能く人をして死の罟を脱れしむ五 善にして哲きものは恩を蒙るされど悖逆者の途は艱難なり二六 凡そ賢者は知識に由りて事をおこなひ 愚なる者はおのれの痴を顯す二七 惡き使者は災禍に陥るされど忠信なる使者は良薬の如し二八 貧乏と恥辱とは教訓をすつる者にきたるされど 謹責を守る者は尊まる二九 望を得れば心に甘し 愚なる者は惡を棄つることを嫌ふ三〇 智慧ある者と偕にあゆむものは智慧をえ 愚なる者の友となる者はあしくなる三二 わざはひは罪人を追ひ 義者は善報をうく三三 善人はその産業を子孫に遺す されど罪人の資財は義者のために蓄へらる三三 貧しき者の新田にはおほくの糧ありされど不義によりて亡る者あり三四 鞭をくはへざる者はその子を憎むなり子を愛する者はしきりに之をいましむ三五 義しき

者は食をえて飽くされど悪者の腹は空し
 第四章一 智慧ある婦はその家をたて 愚なる婦はおのれの手をもて之を毀つ二 直くあゆむ者はエホバを畏れ 曲りてあゆむ者はこれを侮る三 愚なる者の口にはその傲のために鞭笞あり 智者の口唇はおのれを守る四 牛なければ飼菊倉むなし 牛の力によりて生産る物おほし五 忠信の證人はいつはらず 虚偽のあかしびとは 謊言を吐く六 嘲笑者は智慧を求むれどもえず 哲者は知識を得ること容易し七 汝おろかなる者の前を離れされつひに知識の彼にあるを見ざるべし八 賢者の智慧はおのれの道を睥るにあり 愚なる者の痴は欺くにあり九 おろろかなる者は罪をかるんずされど 義者の中には恩恵あり一〇 心の苦みは心みづから知る其よろこびには他人あづからず二 悪者の家は亡され 正直き者の幕屋はさかゆ三人の みづから見て正しとする途にしてその終はつひに死にいたる途となるものあり三 笑ふ時にも心に悲あり 歡樂の終に憂あり四 心の恃れる者はおのれの途に飽かん 善人もまた自己に飽かん五 拙者はすべての言を信ず 賢者はその行を慎む六 智慧ある者は怖れて悪をはなれ 愚なる者はたかぶりて怖れず七 怒り易き者は愚なることを行ひ 悪き謀計を設くる者は悪まる八 拙者は愚なる事を得て所有となし 賢者は知識をもて冠弁となす九 悪者は善者の前に俯伏し 罪ある者は義者の門に俯伏す一〇 貧者はその鄰近にさへも悪まるされど 富者を愛する者はおほし二二 其の鄰近を藐むる

者は罪あり 困苦者を憐むものは幸福あり三 悪を謀る者は自己をあやまるにあらずや 善を謀る者には 憐憫と眞實とあり二三 すべて 勤勞には利益ありされど 口唇のことは 貧乏をきたらすのみなり二四 智慧ある者の財實はその冠弁となる 愚なる者のおろかは ただ痴なり二五 眞實の證人は人のいのちを救ふ 謊言を吐く者は 偽人なり二六 エホバを畏ることは 堅き依頼なり 其の兒輩は 逃避場をうべし二七 エホバを畏ることは 生命の泉なり 人を死の罟より脱れしむ二八 王の榮は 民の多きにあり 牧伯の衰敗は 民を失ふにあり二九 怒を遅くする者は 大なる知識あり 氣の短き者は 愚なることを顯す三〇 心の安穩なるは 身のいのちなり 娼妓は 骨の腐なり三一 貧者を虐ぐる者は 其の造主を侮るなり 彼をうやまふ者は 貧者をあはれむ三二 悪者は 其の惡のうちにて亡され 義者はその死ぬる時にも 望あり三三 智慧は 哲者の心にとどまり 愚なる者の衷にある事は あらはる三四 義は 國を高くし 罪は 民を辱しむ三五 さとき 僕は 王の恩を蒙り 辱をきたらす者は 其の震怒にあふ
 第五章一 柔和なる答は 憤恨をとどめ 厲しき言は 怒を激す二 智慧ある者の舌は 知識を善きものと おもはしめ 愚なる者の口はおろかをはく三 エホバの目は 何處にもありて 惡人と善人とを鑒みる四 溫柔き舌は 生命の樹なり 恃れる舌は 靈魂を傷ましむ五 愚なる者は 其の父の訓を かるんず 誠命をまもる者は 賢者なり六 義者の家には 多くの資財あり 惡者の利潤には 擾累あり七

智者のくちびるは知識をひろむ 愚なる者の心は定りなしハ
 悪者の祭物はエホバに憎まれ直き人の祈は彼に悦ばる九 悪者の
 の道はエホバに憎まれ正義をもとむる者は彼に愛せらる一〇 道
 をはなる者には厳しき懲治あり 譴責を惡む者は死ぬべし二
 陰府と沉淪とはエホバの目の前にあり 況て人の心をや三 嘲笑
 者は誡めらるることを好まず また智慧ある者に近づかず四 心
 に喜樂あれば顔色よろこばし 心に憂苦あれば氣ふさぐ二四
 哲者のこころは知識をたづね 愚なる者の口は愚をくらふ一五
 艱難者の日はごとごとく悪く 心の權べる者は恒に酒宴にあり一
 六 すこしの物を有てエホバを畏るるは多の賣をもちて擾煩ある
 に愈る一七 蔬菜をくらひて互に愛するは肥たる牛を食ひて互に
 恨むるに愈る一八 憤ほり易きものは争端をおこし 怒をおそく
 する者は争端をとどむ一九 情者の道は棘の籬に似たり 直者
 の途は平坦なり二〇 智慧ある子は父をよるこばせ 愚なる人はそ
 の母をかるんす二 無知なる者は愚なる事をよるこび 哲者はそ
 の途を直くす三 相議ることあらざれば謀計やぶる 議者おほ
 ければ謀計かならず成る三 人はその口の答によりて喜樂をつ
 言語を出して時に適ふはいかに善らずや二四 智人の途は生命の
 路にして上へ昇りゆくこれ下にあるところの陰府を離れんが
 爲なり三五 エホバはたかぶる者の家をほろぼし 寡婦の境界をさ
 だめたまふ二六 あしき謀計はエホバに憎まれ 溫柔き言は潔白し
 二七 不義の利をむさぼる者はその家をわづらはせ 賄賂をにくむ

者は活ながらふべし二八 義者の心は答ふべきことを考へ 悪者
 の口は惡を吐く二九 エホバは悪者に遠ざかり 義者の祈禱をき
 きたまふ三〇 目の光は心をよるこばせ 好音信は骨をつるほす三
 生命の誠命をきくところの耳は智慧ある者の中間に駐まる三
 教をすつる者は自己の生命をかるんずるなり 懲治をきく者は
 聰明を得三三 エホバを畏るることは智慧の訓なり 謙遜は尊貴に
 先たつ
 第一六章 心に謀るところは人にあり 舌の答はエホバより出
 づ二人の途はおのれの目にごとごとく潔しと見ゆ 惟エホバ靈魂
 をはかりたまふ三 なんぢの作爲をエホバに託せよさらば汝の謀
 るところ必ず成るべし四 エホバはすべての物をおののおのの用
 のために造り 悪人をも惡き日のために造りたまへり五 すべて
 心たかぶる者はエホバに惡まれ 手に手をあはするとも罪をま
 ぬかれし六 憐憫と眞實とによりて愆は贖はる エホバを畏るこ
 とによりて人惡を離る七 エホバもし人の途を喜ばばその人の敵
 をも之と和がしむべし八 義によりて得たるところの僅少なる物
 は不義によりて得たる多の資財にまさる九 人は心におのれの途
 を考へはかるされどその步履を導くものはエホバなり一〇 王の
 くちびるには神のさばきあり 審判するときその口あやまる可
 らず二 公平の權衡と天秤とはエホバのものなり 囊にある法馬
 もことごとく彼の造りしものなり三 惡をおこなふことは王の
 憎むところなり 是その位は公義によりて堅く立ばなり三 義し

き口唇は王によるこばる彼等は正直をいふものを愛す一四王の
 怒は死の使者のごとし智慧ある人はこれをなだむ一五王の面の
 光には生命ありその恩寵は春雨の雲のごとし一六智慧を得るは
 金をつるよりも更に善らずや聰明をつるは銀を得るよりも望
 まし一七惡を離るるは直き人の路なりおのれの道を守るは靈魂
 を守るなり一八驕傲は滅亡にさきだち誇る心は傾跌にさきだつ
 九卑者に交りて謙たるとは驕ぶる者と偕にありて贖物をわか
 つに愈る二〇慎みて御言をおこなふ者は益をつべしエホバに
 倚頼むものは福なり二一心に智慧あれば哲者と稱へらるるく
 びる甘ければ人の知識をます二二明哲はこれを持つものに生命
 の泉となる愚なる者をいましむる者はおのれの痴是なり二三
 智慧ある者の心はおのれの口ををしへ又おのれの口唇に知識
 をます二四こころよき言は蜂蜜のごとくにして靈魂に甘く骨に
 良薬となる五人の自から見て正しとする途にしてその終はつ
 ひに死にいたる途となるものあり二六勞をるものは飲食のため
 に骨をるはその口おのれに迫ればなり二七邪曲なる人は惡を掘
 るその口唇には烈しき火のごときものあり二八いつはる者はあ
 らそひを起しつけぐちする者は朋友を離れしむ二九強暴人はそ
 の鄰をいざなひ之を善らざる途にみちびく三〇その目を閉て惡
 を謀りその口唇を盛めて惡事を成遂ぐ三一白髪は榮の冠弁なり
 義しき途にてこれを見ん三二怒を遅くする者は勇士に愈りおの
 れの心を治むる者は城を攻取る者に愈る三三人は籐をひくされ

ど事をさだむるは全くエホバにあり
 第一七章一睦しつして一塊の乾けるパンあるはあらそひあり
 て宰れる畜の盈たる家に愈る一かしこき僕は恥をきたらす子
 ををさめ且その子の兄弟の中において産業を分ち取る三銀を
 試むる者は坩堝金を試むる者は鑪人の心を試むる者はエホバ
 なり四惡を行ふものは虚偽のくちびるにきき虚偽をいふ者はあ
 しき舌に耳を傾ぶく五貧人を嘲るものはその造主をあなどる
 なり人の災禍を喜ぶものは罪をまぬかれず六孫は老人の冠弁な
 り父は子の榮なり七勝れたる事をいふは愚なる人に適はず況
 て虚偽をいふ口唇は君たる者に適はんや八贈物はこれを受る
 者の目には貴き珠のごとしその向ふところにて凡て幸福を買
 ふ九愛を追求むる者は人の過失をおほふ人の事を言ひふるる者
 は朋友をあひ離れしむ〇一句の誠命の智人に徹るは百回扑つ
 ことの愚なる人に徹るよりも深し二叛きもとる者はただ惡き
 ことのみをもとむ比故に彼にむかひて殘忍なる使者遣はさる一
 二愚なる者の愚妄をなすにあはんよりは寧ろ子をとられたる牝
 熊にあへ三惡をもて善に報ゆる者は惡その家を離れし四爭端
 の起源は堤より水をもらすに似たりこの故にあらそひの起ら
 ざる先にこれを止むべし五惡者を義とし義者を惡しとする
 この二の者はエホバに憎まる一六愚なる者はすでに心なし何ぞ
 智慧をかはんとて手にその價の金をもつや一七朋友はいづれの
 時にも愛す兄弟は危難の時のために生る一八智慧なき人は手を

拍てその友の前にて保證をなす一九 爭端をこのむ者は罪を好み
 その門を高くする者は敗壞を求む二〇 邪曲なる心ある者はさい
 はひを得ずその舌をみだりにする者はわざはひに陥る二一 愚な
 る者を産むものは自己の憂を生じ 愚なる者の父は喜樂を得ず二
 二 心のたのしみは良薬なり 靈魂のうれひは骨を枯す二三 惡者
 は人の懐より賄賂をつけて審判の道をまぐ二四 智慧は哲者の面
 のまへにありされど愚なる者は目を地の極にそそぐ二五 愚なる
 子は其父の憂となり亦これを生る母の煩勞となる二六 義者を
 罰するは善らず 貴き者をその義きがために扑は善らず二七 言
 を寡くする者は知識あり 心の靜なる者は哲人なり二八 愚なる
 者も黙するときは智慧ある者と思はれその口唇を閉るときは
 哲者とおもはるべし

第一八章 自己を人と異にする者はおのれの欲するところのみ
 を求めてすべての善き考察にもとる二 愚なる者は明哲を喜ばず
 惟おのれの心意を顯すことを喜ぶ三 惡きたれば藐視したが
 ひてきたり恥きたれば凌辱もともに来る四人の口の言は深水
 の如し湧てながるる川 智慧の泉なり五 惡者を偏視るは善らず
 審判をなして義者を惡しとするも亦善らず六 愚なる者の口唇
 はあらしむを起しその口は打るることを招く七 愚なる者の口
 はおのれの敗壞となりその口唇はおのれの靈魂の害となる八人
 の是非をいふもの言はたはぶれのごとしといへども反つて腹
 の奥に在る九 その行爲をおこたる者は滅すもの兄弟なり一〇

エホバの名はかたき櫓のごとし 義者は之に走りいりて救を得
 二 富者の資財はその堅き城なりこれを高く石垣の如くに思
 ふ三人の心のたかぶりは滅亡に先だち 謙遜はたふとまるる事
 にさきだつ三 いまだ事をきかざるさきに應ふる者は愚にして
 辱をかうぶる四 人の心は尚其疾を忍ぶべしされど心の傷める
 時は誰かこれに耐んや五 哲者の心は知識をえ 智慧ある者の耳
 は知識を求む六 人の贈物はその人のために道をひらきかつ貴
 きもの前にこれを導く七 先に訴訟の理由をのぶるものは
 正義に似たれどもその鄰人きたり詰問ひてその事を明かにす
 一八 籤は爭端をとどめ且つよきもの間にへだてとなる一九 怒れ
 る兄弟はかたき城にもまさりて説き伏せがたし 兄弟のあらそ
 ひは櫓の貫木のごとし二〇 人は口の徳によりて腹をあかしその
 口唇の徳によりて自ら飽べし二一 死生は舌の權能にありこれを
 愛する者はその果を食はん二三 妻を得るものは美物を得るなり
 且エホバより恩寵をあたへらるる二三 貧者は哀なる言をもて乞
 ひ 富人は厲しき答をなす二四 多の友をまつくる人は遂にその
 身を亡す 但し兄弟よりもたのもしき知己もまたあり

第一九章 ただしく歩むまつしき者はくちびるの悖れる愚なる
 者に愈る二 心に思慮なければ善らず 足にて急ぐものは道にま
 よふ三 人はおのれの痴によりて道につまづき 反て心にエホバ
 を怨む四 資財はおほくの友をあつむされど貧者はその友に疎
 まる五 虚偽の證人は罰をまぬかれず 謊言をはくものは避るる

ことをえず六 君に媚る者はおほし 凡そ人は贈物を與ふる者の
 友となるなり七 貧者はその兄弟すらも皆これをにくむ 況てそ
 の友これに遠ざからざらんや 言をはなちてこれを呼とむ 況て
 かへらざるなり八 智慧を得る者はおのれの靈魂を愛す 聰明をた
 もつ者は善福を得ん九 虚偽の證人は罰をまぬかれず 謊言をは
 く者はほろぶべし一〇 愚なる者の驕奢に居るは適當からず 況て
 僕にして上に在る者を治むることをや 一 聰明は人に怒をしの
 ばしむ 過失を宥すは人の榮譽なり 二 王の怒は獅の吼るが如く
 その恩典は草の上におく露のごとし 三 愚なる子はその父の
 災禍なり 妻の相争そふは雨漏のたえぬにひとし 四 家と資財と
 は先祖より承嗣ぐもの 賢き妻はエホバより賜ふものなり 五
 懶惰は人を耐疎せしむ 懈怠人は饑べし 六 誠命を守るものは
 自己の靈魂を守るなり 七 その道をかるむるものは死ぬべし 八
 貧者をあはれむ者はエホバに貸すなり 九 その施濟はエホバ償
 ひたまはん 一〇 望ある間に汝の子を打てこれを殺すところを起
 すなかれ 一 怒ること烈しき者は罰をつく 汝もしこれを救ふ
 ともしばしば然せざるを得じ 二 〇 なんぢ勸をきき訓をつけよ 然
 ばなんぢの終に智慧あらん 二 人の心には多くの計畫ありされ
 ど 惟エホバの旨のみ立べし 三 人のよるこびは施濟をするにあ
 り 貧者は謙 人に愈る 三 三 エホバを畏ることは人をして生命
 にいたらしめ かつ恒に飽足りて災禍に遇ざらしむ 四 情者は
 その手を盤に在るも之をその口に擧ることをだにせず 五

嘲笑者を打て さらば拙者も慎まん 哲者を謹めよ さらばかれ
 知識を得ん 二 六 父を煩はし 母を逐ふは羞恥をきたらし 凌辱をま
 ねく子なり 二 七 わが子よ 哲言を離れしむる教を聴くことを息め
 よ 二 八 悪き證人は審判を嘲り 悪者の口は惡を呑む 二 九 審判は
 嘲笑者のために備へられ 鞭は愚なる者の背のために備へらる
 第二〇章 一 酒は人をして嘲らせ 濃酒は人をして騒がしむるに
 迷はざる者は無智なり 二 王の震怒は獅の吼るのごとし 彼を怒
 らする者は自己のいのちを害ふ 三 標かに居りて争はざるは人
 の榮譽なり すべて愚なる者は怒り争ふ 四 情者は寒ければとて
 耕さず 二 〇 故に收穫のときにおよびて求るとも得るところな
 し 五 人の心にある謀計は深き井の水のごとし 然れど哲人はこ
 れを汲出す 六 凡そ人は各自おのれの善を誇るされど誰か忠信
 なる者に遇し 七 身を正しくして步履む 義人はその後の子孫
 に福祉あるべし 八 審判の位に坐する王はその目をもてすべての
 惡を散す 九 たれか我わが心をきよめわが罪を潔められたりとい
 ひ得るや 一 〇 二種の權衡 二種の斗量は等しく エホバに憎まる 二
 幼子といへどもその動作によりておのれの根性の清きか或は正
 しきかをあらはす 三 聴くところの耳と視るところの眼とはと
 もにエホバの造り給へるものなり 三 三 なんぢ睡眠を愛すること
 勿れ 恐くは貧窮にいたらん 汝の眼をひらけ 然らば糧に飽べ
 し 二 四 買者はいふ 惡し 惡しと 然れど去りて後はみづから誇る 二 五
 金もあり 眞珠も多くあれど 貴き器は知識のくちびるなり 二 六 人

の保證をなす者よりは先その衣をとれ他人の保證をなす者
 ばかりとらへよ七 欺きとりし糧は人に甜しされど後にはそ
 の口に沙を充されん八 謀計は相議るによりて成る 戦はんと
 せば先よく議るべし九 あるきめぐりて人の是非をいふ者は
 密事をもらす 口唇をひらきてあるくものと交ること勿れ二〇お
 のれの父母を罵るものはその燈火くらやみの中に消ゆべし二
 初に俄に得たる産業はその終さいはひならず三 われ惡に報い
 んと言ふこと勿れエホバを待て彼なんぢを救はん三二 種の
 法馬はエホバに憎まる 虚偽の權衡は善らず三四 人の步履はエホ
 バによる 人いかで自らその道を明かにせんや三五 漫に誓願をた
 つることは其人の咎となる 誓願をたててのちに考ふることも亦
 然り二六 賢き王は笮をもて鞭ることく 惡人を散し 車輪をもて
 碾すことく之を罰す二七 人の靈魂はエホバの燈火にして人の心
 の奥を窺ふ二八 王は仁慈と眞實をもて自らたもつその位もまた
 恩惠のおこなひによりて堅くなる二九 少者の榮はその力おい
 たる者の美しきは白髪なり三〇 傷つくまでに打たば惡きところ
 きよまり 打てる鞭は腹の底までもとほる

第二章 一 王の心はエホバの手の中にありて恰かも水の流れの
 ごとし彼その聖旨のままに之を導きたまふ二人の道はおのれの
 目に正しとみゆされどエホバは人の心をはかりたまふ三 正義と
 公平を行ふは犠牲よりも愈りてエホバに悦ばる 四 高ぶる目と驕
 る心とは惡人の光にしてただ罪のみ五 勤めはたらく者の圖ると

ころは遂にその身を豊裕ならしめ 凡てさわがしく急ぐ者は
 貧乏をいたす六 虚偽の舌をもて財を得るは吹はらはるる雲烟の
 ごとし之を求むる者は死を求むるなり七 惡者の殘虐は自己を
 亡すこれ義しきを行ふことを好まざればなり八 罪人の道は曲り
 潔者の行爲は直し九 相争ふ婦と偕に室に居らんよりは屋蓋の
 隅にをるはよし一〇 惡者の靈魂は惡をねがふその鄰も彼にあは
 れみ見られず一 あざけるもの罰をつくれは拙者は智慧を得
 ち象あるもの教をつくれば知識を得二 義しき神は惡者の家へ
 みとめて惡者を滅亡に投げたたまふ三 耳を掩ひて貧者の呼
 ぶ聲をきかざる者はおのれ自ら呼ぶときもまた聽れざるべし一
 四 潜なる饋物は忿恨をなだめ懐中の賄賂は烈しき噴毒をやは
 らぐ二五 公義を行ふことは義者の喜樂にして惡を行ふもの
 敗壞なり二六 さとりの道を離るる人は死し者の集會の中にをら
 ん二七 宴樂を好むものは貧人となり 酒と膏とを好むものは富
 をいたさじ二八 惡者は義者のあがなひとなり 恃れる者は直き
 者に代る二九 争ひ怒る婦と偕にをらんよりは荒野に居るはよし
 三〇 智慧ある者の家には貴き寶と膏とあり 愚なる人は之を吞つ
 ぐす三 正義と憐憫と追求むる者は生命と正義と尊貴とを得べ
 し三 智慧ある者は強者の城にのぼりてその堅く頼むところを
 倒す三三 口と舌とを守る者はその靈魂を守りて患難に遇せじ三四
 高ぶり驕る者を嘲笑者となづくこれ驕奢を逞しくして行ふも
 のなり三五 情者の情慾はおのれの身を殺す 是はその手を肯て

働かせざればなり二六人は終日しきりに慾を圖るされど義者は與へて吝まず七 惡者の献物は憎まる 況て惡き事のために獻ぐる者をや八 虚偽の證人は滅さる 然れど聽く人は恒にいふべし九 惡人はその面を厚くし 義者はその道を謹む三〇 艾ホバにむかひては智慧も明哲も謀略もなすところなし三 戰闘の日のために馬を備ふされど勝利は艾ホバによる

第二章 嘉名は大なる富にまさり恩寵は銀また金よりも佳し 二 富者と貧者と偕に世に在る 凡て之を造りし者は艾ホバなり 三 賢者は災禍を見てみづから避け 拙者はすすみて罰をうく 四 謙遜と艾ホバを畏る事との報は富と尊貴と生命となり 五 悖れる者の途には荆棘と罟とあり 靈魂を守る者は遠くこれを離れん 六 子をその道に従ひて教へよ 然ばその老たる時も之を離れじ 七 富者は貧者を治め借者は貸人の僕となる 八 惡を播くものは禍害を穡り その怒の杖は廢るべし 九 人を見て患む者はまた患まる 此はその糧を貧者に與ふればなり一〇 嘲笑者を逐へば 爭論も亦さり 且鬪諍も恥辱もやむ 二 心の潔きを愛する者はその口唇に憐憫をもてり 王その友とならん 三 艾ホバの目は知識ある者を守る 彼は悖れる者の言を敗りたまふ 三 情者はいふ獅そとにあり われ嚮にて殺されんと 四 妓婦の口は深き坑なり 艾ホバに憎まるる者これに陥らん 五 痴なること子の心の中に繋がる 懲治の鞭これを逐いだす 一六 貧者を虐げて自らを富さんとする者と富者に與ふる者とは遂にかならず貧しくなる 一七

汝の耳を傾ぶけて智慧ある者の言をきき且なんぢの心をわが知識に用ゐよ 一八 汝の腹にたもちて 盡くなんぢの口唇にそなはらしめば 樂しかるべし 一九 汝をして艾ホバに倚頼ましめんが爲にわれ今日これを汝に教ふ 二〇 われ勸言と知識とをふくみたる 勝れし言を汝の爲に録ししに あらずや 二一 これ汝をして眞の言の確實なることを曉らしめ 且なんぢを遣しし者に眞の言を持歸らしめん 爲なり 二二 弱き者を弱きがために掠むることなかれ 艱難者を門にて壓つくること勿れ 二三 是は艾ホバその訴を糺し且かれらに害ふものの生命をそこなはん 二四 怒る者と交ること勿れ 憤ぼる人とともに往くことなかれ 二五 恐くは汝その道に效ひてみづから罟に陥らん 二六 なんぢ人と手をつつ者となることなかれ 人の負債の保證をなすこと勿れ 二七 汝もし償ふべきものあらずば 人なんぢの下なる臥牀までも奪ひ取ん 是豈よからんや 二八 なんぢの先祖がたてし古き地界を移すこと勿れ 二九 汝その業に巧なる人を見るか 斯る人は王の前に立んかならず 賤者の前にたじ

第三章 なんぢ侯たる者とともに坐して食ぶときは 慎みて 汝の前にある者の誰なるかを思へ 三 汝もし食を嗜む者ならば 汝の喉に刀をあてよ 三 其の珍饈を貧り食ふこと勿れ 此れ迷惑の食物なればなり 四 富を得んと 思煩らふこと勿れ 自己の明哲を 恃むこと勿れ 五 なんぢ虚しきに歸すべき者に目をとむるか 富はかならず自ら翹を生じて 驚のごとく 天に飛さらん 六 惡目をす

る者の糧をくらふことなくその珍饈をむさぼりねがふことな
 かれ七そはその心に思ふごとくその人となりも亦しければなり
 彼れなんぢに食へ飲めといふこといへどもその心は汝に眞實なら
 ず八 汝つひにその食へる物を吐出すにいたり且その出しし
 懇懃の言もむなしくならん九 愚なる者の耳に語ること勿れ彼
 なんぢが言の示す明哲を藐めん〇 古き地界を移すことなれ
 孤子の畑を侵すことなれ二 そはかれが曠者は強し 必ず汝
 に對らひて之が訴をのべん三 汝の心を教に用ゐ 汝の耳を
 知識の言に傾けよ三子を懲すことを爲ざるなれ鞭をもて彼
 を打とも死ることあらじ四 もし鞭をもて彼をつたばその靈魂
 を陰府より救ふことをえん五 わが子よもし汝のこころ智から
 ば我が心もまた歡び六 もし汝の口唇ただしき事をいば我が
 腎腸も喜ぶべし七 なんぢ心に罪人をつらやむ勿れただ終日
 ホバを畏れよ八 そは必ず應報ありて汝の望は廢らざればなり
 九 わが子よ 汝きて智慧をえかつ汝の心を道にかたづけよ〇
 酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ二 それ酒にふける
 者と肉を嗜む者とは貧しくなり 睡眠を貧る者は散れたる衣を
 きるにいたらん三 汝を生る父にきけ 汝の老たる母を軽んず
 る勿れ三 眞理を買へこれを售るなれ智慧と誠命と知識とま
 た然あれ四 義き者の父は大によこび 智慧ある子を生る者は
 これがために樂しまん五 汝の父母を樂しませ 汝を生る者を
 喜ばせよ六 わが子よ 汝の心を我にあたへ 汝の目にわが途を樂

しめ七 それ妓婦は深き坑のごとく淫婦は狭き井のごとし八 彼
 は盜賊のごとく人を窺ひかつ世の人の中に悖れる者を増なり二
 九 禍害ある者は誰ぞ憂愁ある者は誰ぞ 爭端をなす者は誰ぞ
 煩慮ある者は誰ぞ 故なくして傷をうくる者は誰ぞ 赤目ある者
 は誰ぞ三〇 是すなはち酒に夜をふかすもの 往て混和せたる酒を
 味ふる者なり三 酒はあかく盃の中に泡だち滑かくたる 汝こ
 れを見るなれ四 是は終に蛇のごとく噬み螻の如く刺すべし三
 三 また汝の目は怪しきものを見 なんぢの心は諛言をいはん三四
 汝は海のなかに偃すもののごとく帆桅の上に偃すもののごと
 し三五 汝いはん人われを撃ども我いたまず 我を拷けども我おほ
 えす 我さめなばまた酒を求めんと

第二章一 なんぢ惡き人を羨むことなれ又これと偕に居らん
 ことを願ふなれ二 そはその心に暴虐をはかりその口唇に人を
 害ふことをいへばなり三 家は智慧によりて建られ明哲によりて
 堅くせられ四 また室は知識によりて各種の貴く美しき寶にて充
 されん五 智慧ある者は強し 知識ある人は力をます六 汝よき
 謀計をもて戰鬪をなせ 勝利は議者の多きによる七 智慧は高く
 して愚なる者の及ぶところにあらず 愚なる者は門にて口を啓
 くことをえず八 惡をなさんと謀る者を邪曲なる者と稱ふ九 愚な
 る者の謀るところは罪なり 嘲笑者は人に憎まる〇 汝もし思難
 の日に氣を挫かば汝の力は弱し二 なんぢ死地に曳れゆく者を
 拯へ滅亡によるめきゆく者をすくはざる勿れ三 汝われら之を

知らずといふとも心をはかる者これを曉らざらんや 汝の靈魂をまもる者これを知らんや 彼はおのの行爲によりて人に報ゆべし 三 わが子よ蜜を食へ 是は美ものなり また蜂のすの滴瀝を食へ 是はなんぢの口に甘し 四 智慧の汝の靈魂におけるも是の如しと知れ これをえばかならず報いありて 汝の望すたれ 五 惡者よ 義者の家を窺ふことなかれ その安居所を攻ること勿れ 六 そは 義者は七次たふるともまた起くされど 惡者は禍災によりて亡ぶ 七 汝の仇たふるともまた起くこと勿れ 彼の亡ぶるときころに喜ぶことなかれ 八 恐くはエホバこれをみて 惡しとし その震怒を彼より離れしめたまはん 九 なんぢ 惡者を怒ることなかれ 邪曲なる者を羨むなかれ 一〇 それ 惡者には後の善實なし 邪曲なる者の燈火は滅されん 二 わが子よ エホバと王とを畏れよ 叛逆者に交ること勿れ 三 斯るものらの災禍は速におこる この兩者の滅亡はたれか知えんや 四 是等もまた智慧ある者の箴言なり 偏り鞠するは善らず 五 罪人に告て 汝は義しといふものを 衆人これを誑ひ 諸民これを惡まん 六 これを謹る者は恩をえん また福祉これにきたるべし 七 ほどこよき 應答をなす者は 口唇に接吻するなり 八 外にて 汝の工を ととのへ 田圃にてこれを自己のためにそなへ 然るのち 汝の家を建よ 九 故なく 汝の鄰に敵して 證することなかれ 汝なんぞ 口唇をもて欺くべけんや 一〇 彼の我に爲しし如く 我も亦かれになすべし われ人の爲ししところに 循ひてこれに報いんといふ

こと勿れ 一〇 われ曾て 情人の田圃と 智慧なき人の葡萄園とをす ぎて 見しに 三 荊棘あまなく 生え 薊その地面を掩ひ その石垣くづれるたり 三 我これをみて 心をとどめ これを觀て 教をえたり 三 しばらく 臥し 暫らく 睡り 手を叉きて 又しばらく 休む 三 四 さらば 汝の貧窮は 盜人のごとく 汝の缺乏は 兵士の如く きたるべし 第二章 一 此等もまた ソロモン の箴言なり ユダの王ヒゼキヤに 屬せる人々これを 轉めたり 二 事を隠すは 神の榮譽なり 事を窮むるは 王の榮譽なり 三 天の高さと 地の深さと 王たる者の心とは 測るべからず 四 銀より 渣滓を除け さらば 銀工の用ぶべき器いでん 五 王の前より 惡者をのぞけ 然ば その位義によりて 堅く 立ん 六 王の前に 自ら 高ぶることなかれ 貴人の場に 立つことなかれ 七 なんぢが 目に見る 王の前にて 下に 下げらるるよりは ここに 上れ といはるること 愈れり 八 汝かろがるしく 出でて 争ふことなかれ 恐くは 終に いたりて 汝の鄰に 辱しめられん その時なんぢ 如何になさんと するか 九 なんぢ 鄰と 争ふことあらば 只これと 争へ 人の 密事を 洩すなかれ 一〇 恐くは 聞者なんぢを 卑しめん 汝そしられて 止ざらん 一 機に かなひて 語る言は 銀の 彫刻物に 金の 林檎を 嵌たるが 如し 二 智慧をもて 謹むる者の 之を 悉く 者の 耳におけることは 金の 巨環と 精金の 飾のごとし 三 忠信なる 使者は 之を 遣す者におけること 權收の日に 冷かなる 雪あるがごとし 能その 主の心を 喜ばしむ 四 おくりものす と 偽りて 誇る人は 雨なき 雲風の 如し 五 怒を 緩くすれば 君も 言を容る 柔かな

る舌は骨を折く一六なんぢ蜜を得るか 惟これを足る程に食へ
 恐くは貪ひ過して之を吐出さん一七なんぢの足を鄰の家にしげ
 くするなかれ 恐くは彼なんぢを厭ひ惡まん一八その鄰に敵して
 虚偽の證をたつる人は斧刃または利き箭のごとし一九艱難に遇
 ふとき忠實ならぬ者を頼むは惡しき齒または跛たる足を恃むが
 ごとし二〇心の傷める人の前に歌をうたふは寒き日に衣をぬぐ
 が如く曹達のうへに酢を注ぐが如し二 なんぢの仇もし饑ゑな
 ば之に糧をくらはせもし渴かば之に水を飲ませよ三 なんぢ斯
 するは火をこれが首に積むなりエホバなんぢに報いたまふべ
 し三三北風は雨をおこし かげごとをいふ舌は人の顔をいからす
 二四 争ふ婦と僮に至に居らんより屋蓋の隅に在るは宜し二五 遠き
 國よりきたる好き消息は渴きたる人における冷かなる水のごと
 し二六 義者の惡者の前に服するは井の濁れるがごとく泉の汚
 れたるがごとし二七 蜜をおほく食ふは善らず 人おのれの榮譽を
 もとむるは榮譽にあらず二八 おのれの心を制へざる人は石垣な
 き壊れたる城のごとし

第二章 榮譽の愚なる者に適はざるは夏の時に雪ふり 穢收の
 時に雨ふるがごとし二 故なき詛は雀の翔り燕の飛ぶが如くにき
 たるものにあらず三 馬の爲には策あり 驢馬の爲には術あり 愚
 なる者の背のために杖あり四 愚なる者の痴にしたがひて答ふる
 こと勿れ 恐くはおのれも是と同じからん五 愚なる者の痴にし
 たがひて之に答へよ 恐くは彼おのれの目に自らを智者と見ん

六 愚なる者に托して事を言おくる者はおのれの足をきり身に害
 をつく七 跛者の足は用なし 愚なる者の口の箴もかくのごとし八
 榮譽を愚なる者に與ふるは石を投石索に繋ぐが如し九 愚なる者
 の口にたもつ箴言は酔へるものの刺ある杖を手にて擧ぐるがご
 とし一〇 愚なる者を傭ひ流浪者を傭ひ者はすべての人を傷くる
 射手の如し一一 狗のかへり來りてその吐たる物を食ふがごとく
 愚なる者は重ねてその痴なる事をおこなふ一二 汝おのれの目に
 自らを智慧ある者とする人を見るか 彼よりも却て愚なる人に
 望あり一三 情者は途に獅あり 衢に獅ありといふ一四 戸の蝶鉸
 によりて轉ることく情者はその口に擧ることを厭ふ一五 情者はその手
 を盤に在るも之をその口に擧ることを厭ふ一六 情者はおの
 れの目に自らを善く答ふる七人の者よりも智慧ありとなす一七
 路をよぎり自己に關りなき争擾にたづさはる者は狗の耳をとら
 ぶる者のごとし一八九 既にその鄰を欺くことをなして我はただ
 戯れしのみといふ者は火箭または鎗または死を擲つ狂人のご
 とし二〇 新なければ火はきえ人のは非をいふ者なければ争端は
 やむ二 煨火に灰をつぎ火に薪をくぶるがごとく争論を好む人
 は争論を起す三 人の是非をいふもの言はたはぶれのごとし
 と雖もかへつて腹の奥に入る三 温かき口唇をもちて惡き心あ
 るは銀の滓をきせたる瓦片のごとし四 恨むる者は口唇をもて
 自ら飾れども 心の衷には虚偽をいだく五 彼その聲を和らかに
 するとともに之を信するなかれその心に七の憎むべき者あればな

り二六たとひ虚偽をもてその恨をかくすともその惡は會集の中
に顯はる二七坑を掘るものは自ら之に陥らん石を轉ばしあぐる
者の上にはその石まるびかへらん二八虚偽の舌はおのれの害す
者を憎み諂口は滅亡をきたらす

第二七章一なんぢ明日のことを誇るなかれそは一日の生ずると
ころの如何なるを知らざればなり二汝おのれの口をもて自ら讃む
ることなく人をして己を讃めしめよ自己の口唇をもてせず
他人をして己をほめしめよ三石は重く沙は軽からず然ど愚なる
者の怒はこの二よりも重し四忿怒は猛く憤恨は烈しされど
嫉妬の前には誰か立ことをを得ん五明白に譴むるに秘に愛す
るに愈る六愛する者の傷つくるは眞實よりし敵の接吻するは
偽詐よりするなり七飽るものは蜂の蜜をも踐つくされど饑たる
者には苦き物さへもすべて甘しハその家を離れてさまよふ人は
その巢を離れてさまよふ鳥のごとし九膏と香とは人の心をよる
こぼすなり心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯のご
とし一〇なんぢの友と汝の父の友とを棄るなかれなんぢ患難に
あぶ日に兄弟の家にいることなけれ親しき隣は疏き兄弟に愈
れり二わが子よ智慧を得てわが心を悦ばせよ然ば我をそしる
者に我こたふることを得ん三賢者は禍害を見てみづから避
け拙者はすすみて罰をうく三人の保證をなす者よりは先そ
の衣をとれ他人の保證をなす者をば固くとらへよ一四晨はやく
起て大聲にその鄰を祝すれば却て呪詛と見なされん一五相争ふ

婦は雨ふる日に絶えずある雨漏のごとし一六これを制ふるものは
風をおさふるがごとく右の手に膏をつかむがごとし一七鐵は鐵
をとぐ斯のごとくその友の面を研なり一八無花果の樹をまもる
者はその果をくらふ主を賣ふものは譽を得一九水に照せば面と
面と相肖るがごとく人の心は人の心に似たり二〇陰府と沈淪と
は飽ことなく人の目もまた飽ことなし二一坩堝によりて銀をた
めし鑪によりて金をためしその讃らるる所によりて人をため
す三なんぢ愚なる者を白にいれ杵をもて麥と偕にこれを搗と
もその愚は去らざるなり三なんぢの羊の状況をよく知りなん
ぢの群に心を留めよ四富は永く保つものにあらずいかで位は
世々にたもたん五艸枯れ苗いで山の蔬菜あつめらる二六羔羊は
なんぢの衣服を出し牝羊は田圃を買ふ價となり二七牝羊の乳
はおほくして汝となんぢの家人の糧となり汝の女をやしなふ
にたる

第二八章一惡者は逐ふ者なけれども逃げ義者は獅子のごと
くに勇まし二國の罪によりて侯伯多くなり智くして知識ある人
によりて國は長く保つ三弱者を慮ぐる貧人は糧をのこさざる
暴しき雨のごとし四律法を棄るものは惡者をほめ律法を守る
者はこれに敵す五惡人は義きことを覺らずエホバを求むる者
は凡の事をさとる六義しくあゆむ貧者は曲れる路をあゆむ
富者に愈る七律法を守る者は智子なり放蕩なる者に交るもの
は父を辱かしむ八利息と高利とをもてその財産を増すものは

貧人をめぐむ者のために之をたくはふるなり九耳をそむけて
 律法を聞ざる者はその祈すらも憎まる一〇義者を惡き道に惑
 す者はみづから自己の阱に陥らんされど質直なる者は福祉を
 つぐべし二富者はおのれの目に自らを智慧ある者となすされ
 ど聰明ある貧者は彼をはかり知る三義者の喜ぶときは大な
 る榮あり惡者の起るときは民身を匿す三その罪を隠すものは
 榮ゆることなし然と認らばして之を離るる者は憐憫をつけん一
 四恒に畏るる人は幸福なりその心を剛愎にする者は災禍に陥る
 べし五貧しき民を治むるあしき侯伯は吼る獅子あるひは饑た
 る熊のごとし二六智からざる君はおほく暴虐をおこなふ不義の
 利を惡む者は遐齡をつべし七人を殺してその血を心に負ふ者
 は墓に奔るなり人これを阻むること勿れ八義く行む者は救を
 え曲れる路に行む者は直に跌れん九おのれの田地を耕す者は
 糧にあき放蕩なる者に従ふものは貧乏に飽く二〇忠信なる人は
 多くの幸福をえ速かに富を得んとする者は罪を免れず二人を
 偏視るはよからず人はただ一片のパンのために怨を犯すなり二
 二惡目をもつ者は財をえんとて急がはしく却て貧窮のおのれ
 に来るを知らず三人を譴むる者は舌をもて諂ふ者よりも大な
 る感謝をつく二四父母の物を竊みて罪ならずといふ者は滅す者
 の友なり三五心に貧る者は争端を起しエホバに倚頼むものは
 豊饒になるべし二六おのれの心を恃む者は愚なり智慧をもて行
 む者は救をえん二七貧者に調すものは乏しからずその目を掩

ふ者は詛を受ること多し二八惡者の起るときは人匿れその滅る
 ときは義者ます
 第二九章一しばしば責られてもなほ強項なる者は救はるること
 なくして猝然に滅されん二義者ませば民よろこび惡きもの權
 を掌らば民かなしむ三智慧を愛する人はその父を悦ばせ妓婦に
 交る者はその財産を費す四王は公義をもて國を堅つすされど
 租税を征取る者はこれを滅す五その鄰に諂ふ者はかれの脚の前
 に羅を張る六惡人の罪の中には罰あり然と義者は歡び樂しむ
 七義きものは貧きもの訟をかへりみる然と惡人は之を知る
 ことを願はず八嘲笑人は城邑を擾し智慧ある者は怒をしつむ九
 智慧ある人おろかなる人と争へば或は怒り或は笑ひて休むこと
 なし〇血をながす人は直き人を惡むされど義き者はその生命
 を救はんことを求む一愚なる者はその怒をことごとく露はし
 智慧ある者は之を心に蔵む二君王もし虚偽の言を聴かばその
 臣みな惡し三貧者と苛酷者と偕に世に在るエホバは彼等の
 目に光をあたへ給ふ四眞實をもて弱者を審判する王はその位
 つねに堅く立つべし五鞭と譴責とは智慧をあたふ任意になし
 おかれたる子はその母を辱しむ一六惡きもの多ければ罪も亦お
 ほし義者は彼等の傾覆をみん一七なんぢの子を懲せさらば彼
 なんぢを安からしめ又なんぢの心に喜樂を與へん一八默示なけ
 れば民は放肆にす律法を守るものは福ひなり一九僕は言をも
 て譴むるとも改めず彼は知れども従はざればなり二〇なんぢ言

を謹まざる人を見しや彼よりは却て愚なる者に望あり二 僕をその幼なき時より柔かに育てなば終には子の如くならしめん三 怒る人は争端を起し憤る人は罪おほし三 人の傲慢はおのれを卑くし心に謙だる者は榮譽を得四 盗人に黨する者はおのれの靈魂を惡むなり彼は誓を聽けども説述せず五 人を畏るれば罣におちいるエホバをたのむ者は護られん六 君の慈悲を求むる者はおほし然れど人の事を定むるはエホバによる七 不義をなす人は義者の惡むところ 義くあゆむ人は惡者の惡むところなり

第三〇章 ヤケの子アゲルの語なる箴言かれイテエルにむかひて之をいへり即ちイテエルとウカルとにいへる所のものなり二 我は人よりも愚なり我には人の聰明あらず三 我いまた智慧をならひ得ずまたいまた至聖きものを曉ることをえず四 天に昇りまた降りし者は誰か風をその掌中に聚めし者は誰か水を衣につつみし者は誰か地のすべての限界を定めし者は誰かその名は何ぞその子の名は何ぞ汝これを知るや五 神の言はみな潔よし神は彼を頼むもの盾なり六 汝その言に加ふることを勿れ 恐くは彼なんちをせめ又なんちを誑る者となしたまはん七 われ二の事をなんちに求めたり我が死ざる先にこれをたまへ八 即ち虚假と謊言とを我より離れしめ我をして貧からしめずまた富しめず惟なくてはならぬ糧をあたへ給へ九 そは我あきて神を知ずといひエホバは誰なりやといはんことを恐れまた貧くして

窃盗をなし我が神の名を汚さんことを恐るればなり一〇 なんぢ僕をその主に讒ることなかれ 恐くは彼なんちを詛ひてなんぢ罪せられん二 その父を誂ひその母を祝せざる世類あり三 おのれの目に自らを潔者となして尚その汚穢を滌はれざる世類あり三 また一の世類あり嗚呼その眼はいかに高きぞやその眼は昂れり二四 その齒は劍のごとくその牙は刃のごとき世類あり彼等は貧き者を地より呑み窮乏者を人の中より食ふ一五 蛙に二人の女あり與へよ與へよと呼はる飽ことを知ざるもの三あり否な四あり皆たれりといはず一六 即ち陰府妊まざる胎水に満されざる地足りといはざる火これなり一七 おのれの父を嘲り母に従ふことをいやしとする眼は谷の鴉これに抜いだし鷲の難これを食はん一八 わが奇とするもの三あり否な四あり共にわが識ざる者なり一九 即ち空にとぶ鷲の路誓の上にはふ蛇の路海にはしる舟の路 男の女にあふの路これなり二〇 淫婦の途も亦しかり彼は食ひてその口を拭ひわれ惡きことを罵ざりきといふ二一 地は三の者によりて震ふ否な四の者によりて耐ることあたはざるなり三 即ち僕たるもの王となるに因り愚なるもの糧に飽るにより三 厭忌はれたる婦の嫁ぐにより婢女その主母に續くに因りなり四 地に四の物あり微小といへども最智し五 蟻は力なき者なれどもその糧を夏のうちに備ふ三六 山鼠は強からざれどもその室を誓につくる三七 蝗は王なけれどもみな隊を立ていづ三八 守宮は手をもてつかまり王の宮にをる三九 善あゆむもの三

あり否な四あり皆よく歩く三〇 獣の中にて最も強くもろもろのものの前より退かざる獅子三 肚帯せし戦馬 牡野羊 および當ること能はざる王これなり三 汝もし愚にして自から高ぶり或は悪きことを計らば汝の手を口に當つべし三 それ乳を搾れば乾酪いで鼻を搾れば血いで 怒を激ぶれば爭端おこる

第三章一レムエル王のことは即ちその母の彼に教へし箴言なり二 わが子よ何を言はんか わが胎の子よ何を言はんか 我が願ひて得たる子よ何を言はんか 三 なんちの力を女につひやすなかれ王を滅すものに汝の途をまかす勿れ四 レムエルよ酒を飲は王の爲べき事に非ず 王の爲べき事にあらず 醇醪を求むるは牧伯の爲すべき事にあらず五 恐くは酒を飲て律法をわすれ且すべて惱まざる者の審判を枉げん六 醇醪を亡びんとする者にあたへ酒を心の傷める者にあたへよ七 かれ飲てその貧窮をわすれ復その苦楚を憶はざるべし八 なんち瘡者のため又すべての孤者の訟のために口をひらけ九 なんち口をひらきて義しき審判をなし貧者と窮乏者の訟を糺せ二 誰か賢き女を見出すことを得んその價は眞珠よりも貴とし三 その夫の心は彼を待みその産業は乏しくならじ四 彼が存命ふる間はその夫に善事をなして悪き事をなさず五 彼は羊の毛と麻とを求め喜びて手から操ぎ六 四商賈の舟のごとく遠き國よりその糧を運び七 夜のあけぬ先に起てその家人に糧をあたへその婢女に日用の分をあたふ二六 田畝をはかりて之を買ひその手の操作をもて葡萄園を植ゑ二七

力をもて腰に帶しその手を強くす二八 彼はその利潤の益あるを知るその燈火は終夜きえず一九 かれ手を紡線車にのべその指に紡錘をとり二〇 手を貧者にのべ 手を困苦者に舒ぶ二 彼は家人の爲に雪をおそれず 蓋その家人みな蕃紅の衣をきればなり三 彼はおのれの爲に美しき褥子をつくり 細布と紫とをもてその衣とせり三三 その夫はその地の長老とともに邑の門に坐するによりて人に知るるなり二四 彼は細布の衣を製りてこれをつり帯をつくりて商賈にあたふ二五 彼は筋力と尊貴とを衣とし且のちの日を笑ふ二六 彼は口を啓きて智慧をのぶ 仁愛の教誨その舌にあり二七 かれはその家の事を鑿み 怠惰の糧を食はず二八 その衆子は起て彼を祝す その夫も彼を讃ていふ二九 賢く事をなす女子は多けれど 汝はすべての女子に愈れり三〇 艶麗はいつはりなり 美色は呼吸のごとし 惟エホバを畏るる女は譽られん三二 その手の操作の果をこれにあたへその行爲によりてこれを邑の門にほめよ